〈研究論文〉

# 日韓交流学習の動向と課題

### 中川 正臣 ・ 岩井 朝乃

### 【要旨】

言語教育における日韓交流学習は30年以上の歴史を持ち、現在でも中等教育や高等教育等で行われている。しかし、その実践が交流学習を通じて何を目指し、どのような学習を展開してきたかは明らかになっていない。そこで、本稿では韓国語教育や日本語教育の中で行われてきた日韓交流学習の先行研究を4つのタイプに分類し、考察した。交流学習は【交流重視型】と【場利用型】から【成果物共有型】へと徐々に拡大してきたが、中でも【場利用型】の交流学習が最も実践されている。本稿ではこの【場利用型】の交流学習が選ばれやすい理由とその問題点、さらには協働性の高い【成果物共有型】や【協働的交流型】の交流学習の可能性について論じる。

キーワード:言語教育、日韓交流学習、先行研究、交流学習の類型、学習者と社会のつながり

### 1. はじめに

日本における韓国語教育(以下:韓国語教育)では、これまで様々な形態による日韓交流学習が行われてきた。高校における韓国語教育では、1980年代、韓国の高校と姉妹校締結が活発になり、研修やその事前事後教育として交流学習が導入された(山下,2000)。これらの日韓交流学習は、「人的交流を通じて国際交流の楽しさを感じること(国際文化フォーラム通信,2000:4)」や「交流に関連付けて他者を理解すること(国際文化フォーラム通信,2003:9)」を目指していることから、国際理解教育の側面を持っていたことが伺える」。一方、大学における韓国語教育は、阪堂(2004)以降、協働的かつ主体的に活動を展開する様々な日韓交流学習の取り組みが報告され、2018年には日韓交流学習に関わる教師研修の実施(澤邉・中川・岩井・相澤,2018)や教師コミュニティの立ち上げ、さらには新たな日韓交流学習の形態として様々な職業、様々な社会活動にかかわる人々と交流しながら学び合う<拡張型交流学習>の提案も行われている(澤邉・中川・岩井・相澤,2018)。

しかし、これら交流学習の実践や研究の動向をまとめ、可視化したものは筆者らの知る限りでは見当たらない。先行研究を考察し、日韓交流学習の現在地を捉えるとともに今後の展望を示すことは、実践研究を行おうとする実践者に対し、よりよい実践のためのリソースが

提供できると考える。そこで、本稿では韓国語教育と日本語教育の間で実践されてきた日韓 交流学習(以下:交流学習)の事例を収集し、その実践がいかなる活動形態なのかを分析し、 今後の課題を示す。

### 2. 交流学習の定義と分析の枠組み

交流学習はこれまで高等教育よりも、初等教育、中等教育において活発に行われてきた。 稲垣(2011:6)は、「異なる国や地域の子供たちが、インターネット上のさまざまなコミュニ ケーション・ツールを活用しながら交流を重ねる中で、仲間意識を育て、ともに学んでいく 活動」と定義している。一方、稲越(2009)は交流学習を「異なった地域や異なった世代間 で、相互に直接的に触れ合ったり、間接的にインターネット等を通して情報を交換したりし ながら、互いの学習を成立させ、互いを理解する方法」と捉えている。稲垣(2011)が学校 と学校の間でインターネットを通じて行われる学校間交流学習に基づいた定義を示したのに 対し、稲越(2009)では、交流学習の対象を地域間交流や世代間交流にまで広げている。確 かに交流学習においては、学習者は同世代で、学生同士等、似た立場にある交流相手だけで なく、まったく異なる世界で生きる交流相手から得られる視点もあるだろう。また、現代社 会においてインターネット上のコミュニケーション・ツールを交流学習に活用することは当 然であるが、とはいえ文通のようなアナログな方法が交流学習の手段として除外されるわけ ではなく、アナログだからこそ生まれる交流の価値もある。これら交流学習の特性とともに 韓国語教育と日本語教育を扱う本稿の特性を考慮し、ここでは交流学習を「韓国語学習と日 本語学習に関わる人々が、様々なコミュニケーション・ツールを活用し、様々な交流を重ね る中で学びを深めていく実践」と定義する。

交流学習における活動内容を分析するための類型は、稲垣他(2001)、澤邊(2010a)、清水・益子(2009)において示されてきた。稲垣他(2001)は、交流学習の類型を【交流体験】、【実践報告】、【共通活動】、【協働制作】に分類している。また、澤邊(2010a)は稲垣他の分類を踏襲しつつ、韓国の高校における交流学習に関する質問紙調査の結果から【交流体験型】、【教科学習型】、【協働活動型】の3分類を示している。稲垣他(2001)をもとに示された稲垣(2011)と澤邊(2010a)で示された交流学習の類型は<表1>の通りである。

稲垣 (2011:6)

# 【交流体験】

交流体験すること自体が主目的。交流を通し てコミュニケーション能力や表現能力の育 成を図る。

### 【実践報告】

交流校それぞれの学級・学年などでの実践をしたりして交流を行うものである。 もとに、話し合いや発表をすることで学習を【教科学習型】 深めていく。

### 【共通活動】

共同観測、共同調査など、調べ方のフォー 動を中心にする。ウェブサイトで蓄積された データを一覧・比較できる。学校名・所在地・【協働活動型】 こるようにデザインされることも多い。

### 【協働制作】

参加校の間で絵やウェブページなどを"協|参加する形で実施されている。 働"して作品にする活動やオフラインの交流 イベント開催のため、企画・運営を生徒たち が行う活動。交流して「いっしょに何かする」 ことを重視している。

### 澤邊 (2010a:133-134)

### 【交流体験型】

交流が成立することそのものを目的とする活 動。姉妹校または姉妹校以外の学校を訪問し、 互いに講演(楽器演奏、ダンス、歌等の披露) を行ったり、文化体験をしたり、授業に参加

お互いの教科学習の深化を主な目的とする活 動。共通のテーマに基づくテレビ会議や、成 果の共有など工学系、語学系、芸術系、情報 マットを提供し、参加校が調査報告をする活工系の教科学習に結び付いた交流学習が行われ ている。

連絡先などの情報を表示したり、ブログなど | 一つのモノ・企画、イベント等をいっしょに を設置することで、コミュニケーションがおし作りあげる活動。韓日高校生間における合同 キャンプの事例がある。交流体験型のホーム スティや学校訪問の活動に加えて、希望者が

一方、清水・益子(2009:92-93)は、交流学習を行う際、参加しているクラスや学習者が相 互に学習過程を共有し、協同する程度をあらわす「活動の協同性」と、交流相手のクラスと 共有する学習デザインの程度をあらわす「共有される対象」をもとに、【協同的交流型】、【交 流重視型】、【場利用型】、【成果物共有型】の4つの交流学習の類型を示している。清水・益 子(2009)が示した類型は、多様な活動が含まれる交流学習を明確に分類するのではなく、 複数の特徴を持つ実践や、その協同性と共有性の度合いを読みとることができる。

多様な実践を扱う本稿では、実践の複合性に注目した清水・益子(2009)の類型を土台と し、<表 2>のような交流学習の類型の枠組みを設け、先行研究における交流学習の実践を 分析する2。

### <表 2> 交流学習の類型の枠組み

学習内容・活動の共有性が高い(学習内容や活動の共有)

### 【交流重視型】 【協働的交流型】 交流すること自体を目的とし、具体、交流相手と学習内容の選定からと 的な成果を求めることは少ない。交よに行い、学習活動と時期を合わせ 流会の開催等がこれに含まれる。 て共有する等、綿密な打ち合わせの 下に学習が設計される。実際の活動 でも学習者は交流相手と頻繁に打 ち合わせを行い、同じ手順を踏んで 活動の 活動の 一つの成果物 (例:演劇)を作る。 協働性 が低い 【場利用型】 【成果物共有型】 が高い 交流重視型同様、交流自体を重視し、交流相手とともにどのような成果 つつ、学習言語による成果物を作る「をあげればよいか、共通のゴールが ことも求める。ただしともに一つの 「定められている。大まかな枠組みと 物を制作するのではなく、交流活動!手順を共有し、交流相手とともに一 を通して得たこと(例:インターつの成果物(例:WEBページや動 ビューやアンケート調査の結果)を一画)を作る。 反映させ、それぞれが作ったものを 一つの場 (例:オンライングループ) で共有する。

協働性

学習内容・活動の共有性が低い(全体の枠組みのみ共有)

分析対象とする交流学習の事例を収集するために、国立情報学研究所が提供する「論文情 報ナビゲーター (https://ci.nii.ac.jp/)」と韓国教育学術情報院が提供する「RISS (http://www.riss.kr/index.do)」、検索サイト「グーグル (https://www.google.co.jp/)」等を中心に 関連文献を収集した。その第一段階として「日韓交流学習」、「交流学習」、「韓国語」、「日本 語」、「하일교류학습(韓日交流学習)」、「교류학습(交流学習)」、「한국어(韓国語)」、「일본어 (日本語)」をキーワードとし、文献検索を行った。また、これ以外にも学会予稿集など交流 学習の事例が掲載されている文献を可能な限り収集した。次に、第二段階として、前述した 本稿における交流学習の定義である「韓国語学習と日本語学習に関わる人々が、様々なコミュ ニケーション・ツールを活用し、交流を重ねる中で学びを深めていく実践」に該当し、かつ、 交流学習の実践における「活動の協働性」と「学習内容・活動の共有性」がわかる交流学習 の事例を選定した。その結果、<表3>に示した13の事例を分析対象とした。

<表3> 分析対象とした事例

事例	文献(著者・年)	学習者		学校内交流/ 学校間交流
		日本	韓国	
1	阪堂千津子(2004)	大学生	大学生	学校間交流
2	高橋万里子(2007)	大学生	大学生	学校間交流
3	西岡麻衣子(2009)	大学生	大学生	学校間交流
4	澤邉裕子(2010b/c)	高校生	高校生	学校間交流
5	谷誠司・内田智子・吉田広毅・ 増井実子・中山晃 (2016)	大学生	大学生	学校間交流
6	中川正臣(2016)	大学生	大学生	学校内交流
7	中川正臣(2017a)	大学生	大学生	学校間交流
8	中川正臣(2017b)	大学生	大学生	学校間交流
9	岩井朝乃・中川正臣(2017)	大学生	大学生	学校間交流
10	岩井朝乃・中川正臣(2018)	大学生	大学生	学校間交流
11	崔秀美・澤邉裕子(2018)	高校生	高校生	学校間交流
12	登川恵利・岩井朝乃(2018)	社会人	大学生	学校間交流
13	早矢仕智子(2018)	大学生	大学生	学校間交流

### 3. 交流学習の類型別分析結果

本稿における分析で、もっとも事例が多かったのが【場利用型】の交流学習である。具体的には、阪堂(2004)、澤邊(2010b/c)、谷他(2016)、中川(2016/2017a/2017b)、登川・岩井(2018)は韓国語教育の視点から、岩井・中川(2017)、早矢仕(2018)、崔・澤邉(2018)は日本語教育の視点からその実践を記述している。

【場利用型】の交流学習の中で見られる活動は、アンケート調査活動(澤邊,2010b;早矢 住,2018)やインタビュー調査活動(澤邊,2010c;中川,2016;登川・岩井,2018)、動画交 換(阪堂,2004;岩井・中川,2017)等である。このような【場利用型】の交流学習の中に は、谷他(2016)のように日韓混合グループがICTを活用し、発表テーマや内容を議論する 活動を取り入れた「活動の協働性」が高い交流学習がある一方<sup>3</sup>、中川(2017b)のように対 面交流後、テーマ(夢や目標を語る)に関する成果物を交流相手に送るという「活動の協働 性」と「学習内容・活動の共有性」が比較的低い交流学習が見られる。また、早矢仕(2018) では交流学習の事前活動として双方のアンケート調査活動を取り入れた後、対面交流を行い、 交流相手と共に活動内容について共にPPTを作成し、成果物を共有する等、【場利用型】に一 部【交流重視型】と【成果物共有型】を取り入れた交流学習も見られる。

【場利用型】の交流学習の中で行われる活動は、授業内で行うものも一部見られるが、多くは授業外の時間を交流の場として活用している。つまり、【場利用型】の交流学習は【交流重視型】のように学習者と交流相手が必ずしもリアルタイムで対面交流を行う必要がなく、教師は交流相手であるクラスと学習内容や活動の枠組みをある程度共有していれば、それぞれの教室の学習目標に沿った学習をデザインすることが可能である。また、【場利用型】の交流学習は、交流相手との協働性が学習プロセスにおいて高くないため、学習言語のレベルの違いによるコミュニケーションの問題が起きにくく、日本と韓国の教育機関の学期開始や終了の時期のズレを調整することも可能である。学習デザインをする教師にとっても実践しやすく、交流学習をする学習者にとっても負担が少ないと言えるが、その反面、学習者と交流相手の自律的かつ継続的な交流の難しさという問題点も指摘されている(崔・澤邉,2018;登川・岩井2018;岩井・中川,2018)。

学習内容・活動の共有性が高い (学習内容や活動の共有)

	【交流重視型】	【協働的交流型】	
活動の 協働性 が低い	高橋(2007) 西岡(2009)	該当なし	
			活動の 協働性
	中川 (2017b) 早矢仕 (2018)		が高い
	阪堂 (2004) 谷他 (2016) 中川 (2017a)		
	澤邊(2010b/c)	岩井・中川 (2018)	
	岩井・中川 (2017)		
	中川(2016) 崔・澤邉(2018)		
	登川・岩井 (2018)		
	【場利用型】	【成果物共有型】	

学習内容・活動の共有性が低い(全体の枠組みのみ共有) <図1> 先行研究における交流学習の類型

一方、活動の協働性が高く、交流相手と一つの成果物を作り出す【成果物共有型】の交流学習は1事例しかなかった。岩井・中川(2018)では学習者と交流相手を混成したグループで一つの動画を作成する【成果物共有型】の交流学習を試みている。この試みは岩井・中川が過去に行った動画交換やインタビュー調査活動といった【場利用型】の交流学習では、交流相手と同じ目標に向かって協力しながら課題を遂行するわけではないため相互作用が起きにくかったという内省が実施の背景にある。この交流学習では、混成グループが相談しながら一つの成果物を作るため、必然的に学習者間のやり取りが多くなったが、事後の調査で、課題を遂行するためのやり取りの複雑さやグループ内での使用言語の偏り等、新たな問題点が浮き彫りになった。

この他、本稿における交流学習の定義には該当しないものの、成果物を協働で制作するために日本語学習者と日本語教員養成を受ける学習者の間で行われた交流学習も見られる。澤 邉・相澤(2015)は韓国の大学における日本語作文クラス(以下:作文クラス)と日本の大学における日本語教員養成課程(以下:日本語教員養成クラス)が協働で、韓国旅行に役立

つパンフレットを制作していく実践を行った。この実践では、作文クラスは韓国に関する情報を発信する発信者として、日本語教員養成クラスは作文クラスの日本語学習者をサポートする支援者として、共に成果物を作成しながら交流していった。作文クラスでは、日本語学習者が成果物を作り上げる過程で自身の日本語力を高め、日本語教員養成クラスでは日本語学習者を支援する過程で日本語教員としての資質の向上させることを目的にした協働性の高い交流学習と言えよう。

最後に、【協働的交流型】を取り上げる。<図1>にも示した通り、本稿では【協働的交流型】の交流学習の事例は収集できなかった。これは、【協働的交流型】の交流学習がその特性上、交流相手と綿密な打ち合わせを行い、同じ手順を踏みながら一つ成果物を作っていくため、学習内容や活動、それを行うための授業時間帯、使用言語の選択、必要な機材等、様々な調整を行わなければならず、困難が生じやすいことが起因していると思われる。しかし、これらを克服した学習デザインであれば、交流学習の実践は可能である。例えば、鄭他(2016)では日本語を使用言語とし、日本の大学生と韓国の大学において日本語を専攻する大学生の交流学習を実践している。この実践では日本の大学で開講された「韓国協定校とのオンライン協働学習」クラスと韓国の大学で開講された「異文化の理解」クラスにおいて、日韓混合グループがオンラインでつながり、テーマを探し、調査し、発表等の活動を行っている。この交流学習は、日韓両言語の能力向上を目的にしてはいない面で本稿で定義した日本語教育と韓国語教育にかかわる人々が学びを深めていく交流学習には該当しないものの、新たな学習の形態として注目に値する。

### 4. 考 察

3章で明らかにしたように、交流学習の研究は、2000年代に【交流重視型】の交流学習から始まり、2010年代には【場利用型】の交流学習が活発に行われるようになった。ここでは交流学習の研究が増加した背景と、中でも【場利用型】の交流学習が多く実践されている理由、そしてその問題点と課題について考察する。

本稿において分析対象とした交流学習の事例は 13 と決して多くない。しかし、その数は徐々に増加傾向にある。その理由として、まず、交流学習を行うための環境が整備されてきたことが挙げられる。現在の交流学習においては SNS が頻繁に活用されているが、SNS を含め、ICT 環境は 10 年前よりも劇的に進化し、教室内外において、教師も学習者も交流しやすい環境が整ったことが交流学習事例の量的変化に関係していると思われる。また、交流学習によって育成される資質や能力が、汎用性の高い能力であることも交流学習の事例増加に起因していると思われる。例えば、2010 年代に入り、韓国語教育と日本語教育の接点から「文化」、「コミュニケーション能力」、「態度」という 3 つの側面を考慮した実践(澤邊、2010b/c)が行われるようになり、近年では ICT の効果的な活用を学習目標に含めた実践(澤邊・相澤、

2015) や「高次思考力」の育成のための交流学習の実践(中川,2017a)も行われている。このような交流相手と積極的にかかわる「態度」の育成や、ICT を含めた情報活用力の向上、そして直面する課題を解決するための「高次思考力」の育成は、国や地域、民族等を問わず、21世紀を生き抜く能力としてOECD(国際経済協力機構)の Key Competencies(「相互作用的道具を用いる」、「異質な集団で交流する」、「自律的に行動する」)等でも提唱されている。交流学習は、これらの21世紀に求められる資質や能力の育成に大きく貢献できると教師たちが評価し、言語教育に積極的に取り入れようとしていることが、交流学習の事例増加につながっていると推測される。

同時に、交流学習の類型に注目してみると【場利用型】の交流学習が選ばれやすいことがわかった。<図1>の横軸である「活動の協働性」という観点から考察すると、協働性の低い交流学習は共に何かをする活動が少ないため、コミュニケーションの複雑さが軽減され、学習者がコミュニケーションに対する過度な負担を感じることなく、余裕をもって学習活動を進めることが可能になるという利点が挙げられる。また<図1>の縦軸である「学習活動や内容の共有性」という視点からは、【場利用型】の交流学習は、交流相手であるクラスと全体の枠組みのみを共有して進めればよいため、日韓の教育機関の学期開始や終了時期、学習目標、シラバスが異なっていても、交流学習を柔軟に取り入れやすいと言える。しかし、交流学習が【場利用型】の交流学習に集中するということは、見方を変えれば、交流学習が学習言語の能力向上や異文化・自文化を認識する機会といったリソースとしてのみ活用されていたり、交流学習を通じて交流相手と何らかの課題を遂行するというより学習言語によるコミュニケーション自体が目的化していると解釈することもできる。勿論、学習言語を用いてコミュニケーションを行い異文化に触れる機会が得られることは学習者にとっては貴重な経験ではあるが、筆者らは交流学習にはそれ以上の価値があると考えている。

交流学習においてコミュニケーション自体が目的化されているとすれば、それは交流学習の意義にも関わることであり、交流学習におけるコミュニケーションのあり方を問い直す必要があるであろう。熊谷・佐藤 (2019:22) では人がコミュニケーションを行う理由について、「どんな理由であれ、その根底には一人の成員として社会に参加するという目的があるはず」だと述べ、現代社会を生きるための言語教育について以下のように記述している。

このような時代に生きる私たちに要求されるのは、「こうすればコミュニケーションがうまくいく」といった紋切り型的なコミュニケーションのパターンを身につけるのではなく、さまざまな予期不可能な状況においてでも臨機応変に適応するための柔軟性、他者との交渉を通して相互理解を目指すための粘り強さ、また、自分とは異質の者や考え方に対して即時の判断を踏みとどまるための寛容さといった資質ではないだろうか。さらに、私たちは単なる情報の送り手、受け手としての役割を果たすだけでは不十分であり、巷に氾濫する情報の適切性・信憑性を見極め、目的に応じて情報を収集したり、新たな情報や知識の

創造に積極的に関わったりしていくことが求められる(熊谷・佐藤, 2019:22)。

筆者らは、ここで述べられている、予期不可能な状況における柔軟な対応や他者との交渉を通しての相互理解、異質な者や考え方を排除しない寛容性等を育みながら社会参加していく実践を可能にするのが【成果物共有型】と【協働的交流型】であると考える。【成果物共有型】と【協働的交流型】は、交流相手と課題を遂行していくため学習プロセスにおいて葛藤や衝突も起こりやすいが、それを乗り越えるための深い対話が生まれる。つまり、その交流相手としかできないローカルな学びが生まれると言えよう。学習言語によるコミュニケーションを超えた上位目標を共有することによって、交流相手は言語や文化の異なりを調整しながら共に目標に向かう学習パートナーとなり、負荷が高まるとしてもリアルな異文化間協働が実現できると言える。

では、【成果物共有型】と【協働的交流型】で得られる学びをいかにして実現していくか。 筆者らはその打開策の一つが教室世界から教室外の世界への越境ではないかと考える。澤邉・中川・岩井・相澤(2018:130)は、教室世界で行われてきた従来の交流学習をクラス間交流学習、学校間交流学習と呼ぶとするならば、教室外の地域社会の人、モノ、こととつながる交流学習は〈拡張型交流学習〉と呼べるものではないかと述べ、「日本語の教室」対「韓国語の教室」という枠組みを越えて、学習者が異世代交流や異業種交流等、社会の様々な対象に向かって共に学びを深めていく〈拡張型交流学習〉の導入を提案している。学習者が社会参加をするということは、教室を越境し、様々な交流相手と対話をし、問題解決をしていくことにほかならない。今後、交流学習は教室という枠組みに捉われない新たな交流をも視野に入れていくべきであろう。

### 5. おわりに

本稿では、韓国語学習者と日本語学習者を対象とした交流学習の実践を清水・益子 (2009) の類型に沿って分析した。事例数は多くないものの、活動の協働性と学習内容・活動の共有性という二つの軸から、交流学習に関する研究動向を明らかにするとともに、直面する課題と一つの提案を示した。筆者らは 2018 年 2 月に (公財) 国際文化フォーラムと (独) 国際交流基金ソウル日本文化センターの共催の下、「日韓合同交流学習研修」を企画、実施した。日韓合わせて 40 名以上の外国語教師 (日本語教師、韓国語教師、ドイツ語教師、ロシア語教師)がつながり、「外国語教育のための交流学習実践コミュニティ」を立ち上げた。この取り組みに関しては、澤邉・中川・岩井・相澤 (2018) にまとめ、教師たちがつながりを持ち、新たな教育実践デザインを生み出すために交流学習実践コミュニティが重要な役割を担うことを述べている。その一方で、教師たちが想定する世界 (社会)が教室という場に限られている傾向があり、これが交流学習の可能性を狭めている。本稿では、交流学習を「韓国語学習と

日本語学習に関わる人々が、様々なコミュニケーション・ツールを活用し、交流を重ねる中で学びを深めていく実践」と定義したため、上述した澤邉・相澤(2015)や鄭他(2016)のような事例は分析対象に含めなかったものの、〈拡張型交流学習〉の可能性を探るためにも交流学習の定義を広く捉え、様々な実践事例を収集・分析するとともに、学習者と社会がつながる交流学習を模索してきたい。

### 【注】

- 1. この時期の交流学習について国際文化フォーラム (2000) では、鹿児島東高校と金海伽耶高校との間で行われたメールによる交流と韓国訪問による対面交流の様子を報告され、国際文化フォーラム (2003) では帝塚山学院泉ヶ丘高校と韓国の姉妹校との文通による交流や訪問による対面交流を組み込んだ学習内容と方法が報告されている。
- 2. 清水・益子(2009)では、「協同」という用語が使用されているが、本稿では、教師や学習者が他者と対等な関係で、一つの目標に向かって、新たなものを創造していくことを含意する「協働」という用語を用いることにする(館岡,2005;坂本,2008)。
- 3. 谷他(2016)の交流学習は、日韓混合グループで議論を重ねている点では【成果物共有型】の交流学習に近いが、成果物自体はそれぞれ教室で、日本語を使用して発表していることからグループ内で一つの成果物を作り上げたとは言えないため、【場利用型】の交流学習に該当すると判断した。

### 【参考文献】

稲垣忠 (2011)「やってみよう、学校間交流学習!」『国際文化フォーラム通信』60 pp.6-8 稲垣忠・堀田龍也・高橋純・黒上晴夫 (2001)「学校間交流実践とコミュニケーション・ツールの関係性」 『教育システム情報学会誌』18 pp.297-307

稲越孝雄(2009)『青少年の交流学習』『生涯学習研究 e 事典』

http//ejiten.javea.or.jp/content3421.html(閲覧日 2019 年 9 月 16 日)

岩井朝乃・中川正臣 (2017)「SNS を利用した日韓交流学習における教師の協働 ―日本語教育と韓国語教育の連携―『韓国日語教育学会 第 31 回国際学術大会』 韓国日語教育学会 予稿集 pp.145-150 岩井朝乃・中川正臣 (2018)「大学間の日韓交流学習の意義と課題 ―継続的な実践と学習デザインの改善を通して―」『韓国日語教育学会・言語文化教育研究学会 共同開催 2018 年度 第 34 回冬季国際学術大会 予稿集」pp.70-72

国際文化フォーラム (2000) 『国際文化フォーラム通信』 48 財団法人国際文化フォーラム 国際文化フォーラム (2003) 『国際文化フォーラム通信』 60 財団法人国際文化フォーラム 坂本旬 (2008) 「「協働学習」とは何か」 『生涯学習とキャリアデザイン』 5 pp.49-57 熊谷由理・佐藤慎司 (2019) 「コミュニカティブ・アプローチをめぐって 一ポスト・コミュニカティブ・

- アプローチがめざすもの—」『コミュニケーションとは何か』pp.2-28
- 澤邉裕子 (2010a) 「韓日学校間交流学習に関する一考察」 『韓国日本語学会第 21 回国際学術発表会論文集』 pp.132-136
- 澤邉裕子 (2010b)「韓国語教育と日本語教育の連携の可能性 ─日韓高校生間の活動型授業の実践報告─」 『朝鮮語教育 ─理論と実践─』5 pp.36-55
- 澤邉裕子(2010c)「韓国の日本語学習者と日本の韓国語学習者間における交流学習」『日本語教育』146 pp.182-189
- 澤邉裕子・相澤由佳(2015)「日本語教員養成履修生は海外の日本語学習者との交流学習を通して何を 学んだか — 『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』に基づいた授業 実践から—」『日本文学ノート』50 pp.43-61
- 澤邉裕子・中川正臣・岩井朝乃・相澤由佳 (2018)「教室と社会をつなげる交流学習実践コミュニティは何を目指すのか:外国語教育における〈拡張型交流学習〉の可能性」『日本語教育研究』44 pp.115-133
- 清水和久・益子典文(2009)「小学校における「自律型国際交流学習」の特徴とそのデザイン ―国際交流学習の実践事例の類型化に基づく特徴の明確化―」『岐阜大学カリキュラム開発研究』27 pp.90-99
- 高橋万里子(2007)「「交流」学習を通した異文化・日本語教育―「姉妹校訪問」プログラムの実践から」 『日本文化研究』24 東アジア日本学会 pp.449-466
- 館岡洋子(2005)『ひとりで読むことからピアリーディングへ』東海大学出版
- 谷誠司・内田智子・吉田広毅・増井実子・中山晃 (2016)「ICT を活用した国際交流に関する実践報告 一日韓高等教育機関における外国語クラスを例に一」『常葉大学教育学部紀要』36 pp.343-354
- 崔秀美・澤邉裕子(2018)「高等学校における日韓交流学習の意義と課題 ―韓国側の視点から―」『韓国日語教育学会・言語文化教育研究学会 共同開催 2018 年度 第34回冬季国際学術大会 予稿集」pp.67
- 鄭惠先・菊池誠治・平山花菜絵・青木麻衣子 (2016)「日韓混成グループによるオンライン協働活動を 主軸とした課題解決型授業の試み」『日本語学研究』49 pp.109-125
- 中川正臣(2016)「学習者は交流学習を通じて何を学んでいるのか ―学習者の自己評価から学習の意義を探る―」『朝鮮語教育 ―理論と実践―』11 pp.70-86
- 中川正臣(2017a)「高次思考力の育成を目指した韓国語教授学習の実践」『目白大学高等教育研究』23 pp.29-36
- 中川正臣 (2017b) 「「夢や目標を韓国語で語ろう」プロジェクトの実践研究 ―実践研究を通じて明らかになる教師の学び―」 『第75 回朝鮮語教育学会』 pp.1-10
- 西岡麻衣子(2009)「多文化理解を目指した体験型交流学習の意義と今後の方向性 ―第5回日韓大学生 国際交流セミナーを通して―」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達 スキルの育成」活動報告書』 pp.280-289
- 登川恵利・岩井朝乃(2018)「社会人と大学生間の日韓交流学習の成果と課題 ―社会人韓国語学習者の

- 視点から一」『韓国日語教育学会・言語文化教育研究学会 共同開催 2018 年度 第 34 回冬季国際学 術大会 予稿集」pp.68-69
- 早矢仕智子 (2018)「韓国人日本語学習者と日本人大学生との交流学習実践 ―相互理解と対話を生み出す交流をめざして―」『日本言語文化』42 pp.51-72
- 阪堂千津子 (2004)「発信型コミュニケーションと相互理解をめざしたビデオ交流授業」『言語文化』7 特集号 pp.167-187
- 山下誠 (2000)「異文化教育としての韓国語教育の可能性 ―日本の高等学校における事例から―」『帝 塚山大学国際理解研究所主催 第 26 回国際理解教育賞 応募論文』

http://home.a08.itscom.net/jakehs/yamasitaronbun.html (閲覧日 2019 年 9 月 15 日)

# Trends and Issues in International Exchange Learning between Korean Learners in Japan and Japanese Learners in Korea

## Masaomi Nakagawa, Asano Iwai

### Abstract

Exchange learning programs between Korean learners in Japan and Japanese learners in Korea, as part of language education, have a history of over 30 years, and are still being implemented in high schools and universities. However, the aims and details of the programs are often unclear. From this perspective, we classified the exchange learning programs in language education between Japan and Korea, as discussed in previous studies, into four types, and investigated each. The exchange learning programs are trending gradually from exchange-focused and opportunity-use types to shared-goal types, but the opportunity-use type has been most frequently implemented. We explain why this type of program is often adopted, as well as its problems, and then discuss the prospects for the shared-goal and cooperative-exchange types, which require a higher level of cooperation.

Keywords: language education, exchange learning between Japan and Korea, previous study, type of exchange learning, connection between learners and society